電車にこだわり続けた、肇ちゃんとの、十数年間の係わりから学ぶこと 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 充彦, 菊沢, 光平, 菊沢, 多美枝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/653

電車にこだわり続けた、肇ちゃんとの、十数年間の係わりから学ぶこと（その1）

木村允彦
菊沢光平[*1]
菊沢多美枝[*2]

本稿では、肇君との係わりの当事者である、菊沢光平、多美枝による手記を「幹」にして、その「側枝」の部分を、木村が補足する様式をとりながら、この間の係わりの経過を報告させて頂く。

はじめに

肇君は、昭和五十八年生まれ、現在、養護学校中等部三年生である。幼くして、「自閉症」もしくは、「自閉的傾向を有する」との診断を受けた。

筆者は、昭和六十年初頭に、様々な診断名を背負う子供達と保護者に通って頂き、子供達が滞りを越えて生き生きと行動を展開出来ることを願って、ささやかな通所の場（『アカシアこどものへや』）を開設した。以来、卒論に向かう学生や参観を希望する現職の方々と共に、空き時間を縫って、許される限り子供達との係わりを持ち続けてきた。

肇君は、四歳の時、母親に伴われて、この簡易通所の場を訪ねてくれた。それが、肇君との「出会い」である。

もとより、肇君の成長の全てを語れるのは、ご両親であり、私は、たかだか週に一度の係わりを持たせて頂いたのに過ぎない。それでも、係わりが長きに渡っただけの理由で、エピソードは尽きない。

ことわり1

本稿の下敷きをなす、菊沢の手記は、今回新しく書き下ろされたものではない。菊沢光平の手記は、「石川県親子通所センター父兄懇話会」で、菊沢多美枝のそれは、「アカシアこどものへや」の勉強会で、それぞれ、話題提供者として講演した時の記録を文字に替えたものである。その上、二人の手記は、卒論をはじめ、別稿でもしばしば引用されている。同一の手記を重ねて使用することは、本来避けるべきかもしれないが、①本稿で肇君を紹介するために、どうしても割愛できない部分であること、②保護者である菊沢は、かつての苦しい係わりの時代を脱したとはいえ、現

＊1　肇君の父親　＊2　肇君の母親

平成10年9月16日受理

在もなお、肇君との係わりの最中にあり、新たな書き下ろしに向かうには時間的な制約があること、③引用する部分は、肇君との係わりの過去の部分に当たるため、記述の重複は必然でもあること、等々の理由で、ここで再度引用したことを了承して頂きたい。

ことわり2

本稿では、差し障りのないと思われる範囲で、固有名詞を使用した。通例では、何らかの配慮のもとに、肇君を「H君」と記すような慣わしがある。しかし、当事者の菊沢は、肇ちゃんと共に自宅界隈はもとより、広く、遠く、全国を、実名で歩き続けた。その手記もまた、実名で語られている。その真摯で潔い生活に、「H君」は、とても似合わない。敢えて実名で記述する所以である。　将来、肇君がこの稿に触れることがあっても、肇君と過ごした十数年間の、苦しくとも「快い時間」の記録を、微笑みながら読んでくれるのに違いない、と思える時代に至った。

ことわり3

手記の中には、成り行き上、病院や施設の様子に係わって記述した部分がある。仮に不穏当な叙述があったとしても、その時々の著者達の思いを吐露したのに過ぎず、中傷の意図は全くない。むしろ、お世話になった多くの方々に、改めて感謝したい。

ことわり4

本稿のここまでは、木村が執筆した。以下は、両菊沢による。

1　肇との十年

菊沢　多美枝

（以下の文章は、肇君が小学部四年の時、「アカシアこどものへや」の懇話会での話題提供を文字化したものである。）

1・1　誕生

私の息子、肇（次男）は、昭和五十八年の九月に誕生しました。誕生したときは、全く異常もなく、健やかな誕生ということで、身体的な発育については、その後ずーっと順調だったので、この子に異常があるっていうことはその時点では全く気が付かなかったです。ただ、ほんとに手がかからないっていうのか、ミルク飲んで、寝て、起きて、おむつ変えて、またミルク飲ましてといった感じで平穏な日々でした。

上の子と一歳七ヶ月しか違わず、むしろ、上の子にとっても手がかかる最中だったんですね。チョロチョロ動き回りますし・・・。

やっぱり、世の中うまく出来ているというか、上の子に手がかかる分だけ、下の子っていうのは、こんなに楽なのかな・・・、神様も良くしたもんだ、っていうぐらいの気持ちで、ずっと育てていました。

一歳ぐらいでもう歩き始めましたし、言葉も、そんなはっきりした言葉っていうんじゃないけど、まあ、声も出していましたし・・・・。　一歳頃、「いや」とかね、「まんま」とか、何かそんな言葉をちょっと言い初めてたんですね。二語くらいしか喋らなかったんですが、ただ、私の上の子の場合も言葉がとっても遅くって、一歳半ぐらいでもまだ、あんまり喋っていなかったので、弟のこの子の場合も、遅いけれど、まあ、個人差の範囲内だなっ

ていう風に考えていました。周りでは心配して下さる方もいらっしゃったけど、「いや、言葉が遅い子もいるし、大丈夫だ」って思えたんです。

その一方で、肇の場合は、「何か、ただ遅いにしてはちょっとおかしいんじゃないかな、上の子とはやっぱりちょっと違うし」、ということで、一歳半から二歳ぐらいの間っていうのは、「本当にどうしてかな、遅いだけなのかな、それとも何かあるのかな」っていう風な思いでずっといたんですね・・・。

そういう、どっちつかずの思いの中で、一番気になったのは、ある日、庭で遊んでいるときに、小さな砂の塊を口に入れて、平気な顔をしていたんですね。もちろん、何でも口に入れる時代だからとは思ったんですが、普通は、砂が口に入ったら、やっぱり気持ち悪いから吐き出すとか何かするのに、平気な顔をして全然気にもかけないし・・・・。

そんなことが何度かあった時に、以前ちょっと本で読んでた『異食症』という言葉がパッと頭に浮かんできて、「あれ、この子、ひょっとしたら」って思ったのが、本当に心配になった最初です。

1・2　最初の相談

で、それからやっぱり、「どうしようかな、どっか連れて行こうかな」と迷いながら、丁度二歳になった時、「このままほっとけないな」っていうんで、一番先に行ったのがK大の『言葉の教室』でした。そこは、二年前から、人に勧められていたので、連れていったんですね。それで、その時どんなお話しがあったかについては、詳しくは憶えていないんですけれども、その時先生に言われた言葉で気になったのは、「まあ、三歳までに話さなかったら、この子は知恵遅れで、もうそのままだ」って・・・。「普通の成長に戻るというか、普通の子のような成長はない」・・・。とにかく「遅れたままで、もうどうにもならない」っていう言葉ですね。

そして、「まあ、（三歳まで）まだ一年あるんだから、《ごっこ遊び》、例えば「ままごと遊びなんかを、会話を入れながらさせたらいい」っていうことでした。「そして、三ヶ月後にもう一回連れていらっしゃい」っていう、それぐらいしか心に残っていないんですよ・・・。その前後に、先生と何をどう話してたかあまり覚えていなくて・・・・・。

やっぱり「遅れているからもう駄目です。」って言われた言葉が一番強烈に残っていますね。凄く残っています。

それで帰りにすぐデパートに寄って、ままごとの玩具を一杯買い込んで帰ってきたんですけれども・・・。でも、肇は興味を示さなかったので、ただ与えるだけに終わってしまいました。・・・。

1・3　S大に、上京

その頃丁度、肇はよく熱を出したり、少し喘息の気があって、毎月毎月、病院に通っていました。小児科の方へ。その時、小児科の待合室に、NHKでやっていた《ことばの教室》という番組のビデオがおいてあり、その先生の書かれた本も、待合室においてあったんです。小児科の先生は、「本も持っていって読んだらいいし、ビデオも貸してあげるから」っていうことで、お借りしてきて、ビデオを見て、本は、本屋さんに注文して買って読みました。

それで、じゃ、一遍、その先生に相談にのって頂こうということで、連絡を取りました。その時、先生から「（自分の）本を読んで、少し勉強してから来るように」って言われたので、一応、もう一度目を通して、そして三歳の時に、S大に行きました。

それで、S大を訪ねる前に、一応、やっぱり、脳の病気があるんじゃないかっていう心配もあったんで、脳波とかCTスキャンとかを取ったんですけれども、その時、脳波は年齢相応に発達しているし、CTスキャンで見る限りは異常はないっていうことを言われまして、それで、S大へ行ったんですね。

それから、S大へ行く少し前から、小松の『N園』という、親子通所施設へも行き始めていました。市の福祉課の方が、「一歳半検診で引っかかって遅れているので、そこに行ったらどうか」ということで行ってたんですね。ということで、N園とS大は時期的に重なっていますが、S大の方を先にお話しします。

1・4　こどもに合わせる

S大へ行って、まず言われたことは、「子供のいう通りに行動する、子供に合わせて生活をするように」っていうことでした。親が子供をどうこうしよう、じゃなくって、子供に合わせていく。子供に対して、こんなふうな働きかけをするっていうよりも、まず、子供から信頼されるように、子供が親を受け入れてくれるように、まずこちらが全てを呑み込んで受け入れる、っていう風なことを言われたんですね。それについては、（あらかじめ準備した）ビデオとか、本にみんな書いてあったことだし、あ、まあ、そういうことなのかなと、あまり深くも考えずに、「それなら、自分にも出来るかな」って思いました。

私、専門家でもないですし、なかなか出来ないこともあるけれども、子供の言うとおりにするんだったら、まあ出来るんじゃないかなって思って、その時は帰って来たわけですね。それで、それから月一回のペースでS大に通いました。それで、二、三回行った時点で、こちらがこんな質問をしたら、先生がどう答えるかっていうのが、もう分かってしまったんですね。自分で質問を出しても、答えが分かるっていうのか、そういう風な状態になってしまったんで、ほんとはもう、行ってもしようがないかな、とも思ったんですけれども、何もしていないっていうのも、ものすごく自分が不安なんですね。やっぱり、通うことで、自分は努力しているんだっていう、自分自身の安心感っていうんですか、それが一つありました。

それから、乗り物が大好きな肇は、東京まで出向く事自体をとっても喜んだんですね。「行くか？」っていうと喜んで「行く」っていうもんで。S大には、小松空港から飛行機に乗って羽田に着き、そこからS大までは、コースが一杯あるんです。最初は面倒なんで、タクシーで行きましたが、浜松町まで出て電車を乗り継いで行くとか、空港からバスで川崎の方へ出て、また電車を乗り継いで行くとか、そういう沢山のコースを、今度は肇がすごく楽しみ出したので、自分が安心することと、肇の喜ぶことと、一挙両得っていう感じで、まる二年ぐらいは通い続けました。

そのうち、肇もS大の様子が分かって来たのか、「行かない」って言い出してね。病院行っても、先生とお話ししてないで、病院の食堂の方へ走っていくのが好きで・・・、私もそれに付いて歩いているから、先生とお話しする時間もなく、ほんとに、先生の顔見てくるっていう、それだけのことなので、ここ何年間かはもう全く行かなくなりました。

1・5　N園で

で、『N園』の方ですけれども、最初は週二回、一時間か二時間程度っていうことで、行きました。その時、やっぱり先生から、「肇と私達がまず、仲良くならなければいけないんだ」と言われて、指導に入られたんですけれども・・・。

当時の肇の問題は、「言葉をしゃべらない」っていうことと、

偏食がとってもひどかったんですね。今でもそうなんですけれども。その二点が表に出ていたもんですから、担当の先生が、その偏食の指導の方にちょっと力が入りすぎちゃったっていうのか、その方向に指導が向いてしまったんですね。私も、肇の様子を喋るときには「偏食はひどい」って話しているんだけれども、一方、別にそれは構わないんだ、って思っていました。　そういうことでやっぱり、少し、『N園』の指導自体について行きにくくなって来ました。「果たして、何のためにこの指導をやっているのかな」と、まず、自分自身が理解出来ないっていうか、「おかしいな、おかしいな」って思いながらいたんですね。それで、一週間分の用紙を渡されて、「何時に何をどれだけ食べたかっていうことを、みんな記録して欲しい」って言われたんですね。当時の私は、ずっと走り回る肇を追いかける生活で、それに精一杯だったので、何時に何をどれだけ食べたかっていう、そういうことはとっても出来ない状態だったので、そんなところから、やっぱり、園との関係が少しギクシャクしてきました。（中略）

それから、今度は、「カード合わせ」のような学習がありました。

先生はとっても一生懸命やって下さっているので、それは分かってはいるんだけれども、どうしてもやり方自体に納得出来ない。先生が説明して下さるんだけれども、私が理解出来ない。「菊沢さん、これだけいうてもなんで分からんのや」って言われるんだけれども、どうしても納得出来ない・・・・・。

1・6『アカシアこどものへや』へ

そのことがあってから、先生が、「木村先生の指導を私達は受けながらやっているんだから」っておっしゃられたもんで、直接先生にお聞きするのがいいんじゃないかっていうことで、こちらへうかがったのが、『アカシアこどものへや』へ通うようになった最初です。アカシアへ来たのが丁度、四歳の半ば過ぎからですね。こちらの方へ来るようになりまして、今もう十歳（執筆当時）ですから、随分長くなりますけれども・・・。ここではホントに、肇のペースで、肇の好きなことをさせてもらって、肇もとってもリラックスしているし、私自身も落ち着くっていうんですか、自分自身がとっても落ち着いて来れました。（中略）

それから、もう、今（執筆当時）は、丁度十歳で、小学校二年生（現在中等部三年生）になります。

1・7　就学のこと

次のひっかかりは、就学ですね。小学校入学っていうところで、やっぱりどうするかっていう問題が出てきました。肇の場合は、集団生活を全くやっていないんですね。『N園』の場合も、親子である時間帯行って来るだけですし、近くの保育園で少し遊ばせてもらったんだけど、とても集団行動できるような子供ではなかったです。それで、就学にあたっては、『就学猶予』ということで、教育委員会の方へお願いしました。「しばらく就学を待って欲しい。現時点では、就学は無理じゃないかと思われるので、待って欲しい。」というふうにお願いしたんですね。それでもやっぱり、その間、色々話し合いをして、担当の先生は、こちらのいうことをある程度理解して分かっては下さったのですが、「就学っていうのは法律で決まったことなんで、猶予はできない」、「親の気持ちは分かるけれども、どうにも出来ないんですよ」ということで、それで最終的に決まったのが小松養護学校の訪問教室に籍をおくっていうことだったんですね。それで、まあ、それも致し方ないかなっと思ってた時に、私、心から「それでいいや」って決めました。木村先生が、「学校へ行くも行かないも、肇が選ぶ

っていうんですか、肇が決めるよ。」っていうようなことを、ちょっとおっしゃられたんですね。

「あ、そうだ。この子、自分で嫌なら行かなければいいんだし、籍を置くぐらいはいいかな」っていうふうに思って、それで入学の手続きを取りました。

1・8　訪問学級から、通学へ

最初の担任の先生は、入学する前から私達の話も聞いて下さったし、これまで行っていた『N園』の先生の所へも出向いて色々様子を聞かれたりして、事前に肇についてのことを相当調べたり、聞いたりして下さっていたんで、「受け入れ」っていうのがとってもスムースに行ったんですね。それで、（訪問学級なので）先生が自宅の方へ来られるんだけれども、折角先生がきて下さる時間に、肇は家にいるかいないか分からない状態からスタートしたんですけれども・・・。ところが、先生が実際に家の方へ来られたのは、しばらくの間だけでした。　「学校行くか」って先生が誘うと、もともと肇は出歩くの大好きですから、「行く」っていうんで、それで先生と一緒に、私も付き添って学校に行きました。学校の中を一周りすると、もう「帰る」っていうんで、「じゃあ、やっぱり帰ろうか」っていう、そういう事を週二回やってたわけですね。そのうち、段々と、先生が迎えに来なくても、「今日学校行こうか」と誘うと、肇が「行く」ようになって・・・。学校に行っても、その日の気分で、三十分いたり、気が向けば二時間ぐらいいたりとか・・・。それで私もずっと学校の中も一緒に付いて回って・・・、ずっとそんな風にして、一年生の間を過ごしました。

一年生の半ばぐらいから、肇が学校の中を先生と一緒に回って歩いている時は、私は部屋で待ってるという形で、肇との距離を置いて、待ってたんですね。ついには、私が車で待ってて、肇は先生と一緒に行動する・・・。すぐ帰ってくることもあるし、待てども待てども出てこないこともあるし、とにかく、ずーっと「車で待つ」状態が一年生、二年生の間続きました。

1・9　スクールバス

それで二年生の途中から、「スクールバスに乗って学校行くか？」って言ったら、これもやっぱり、のりもの大好きが幸いしたのか、バスに乗りたい一心で、「乗ってゆく」っていうんで・・・。それも、家の近くでは乗らないんですね。最初、一番家から近いスクールバスのコースの所で乗ってたんだけど、そこで乗ってくる子が女の子だったんですね。その頃、自分は男だから、女の子と一緒は嫌だいうんで、家から本当に遠い、車で二十分くらいかな、小松空港の近くで乗る男の子が気に入って、一年先輩なんですけれども、その子の所からなら乗るっていうんで、そこでバスに乗って、それで帰りは、私が、また学校へ迎えに行って、学校で待っていると、自分が帰りたい時間に帰って来るんですね。そういうふうにして、二年生から三年生の間過ごしました。そのうち段々、「帰りもバスに乗る」ということで、学校にいる時間もだんだん長くなってきました。

1・10　食事のこと

学校にいる時間が長くなると、今度引っかかってくるのは食事なんですね。偏食ひどいんで・・・。当時の肇は、給食なんかとっても食べられないし、「食べられなかったら食べなくていいです。後はもう家で食べさせますから」っていうふうにお願いしました。　ところが、最初の一年、二年担当であった先生が、『N園』へ行って一つ驚いたことがあり、それは、あの子だけ特別に

麺類を用意して下さって、うどんを自分で作って食べてたんですね。

これまで学校では、きっとそんなこと考えられなかったことなんだと思うんです。食事は基本的な生活習慣で大事な事だから、嫌な物でも無理に押し込んで食べさせるっていうことを聞いて心配してたんだけれども・・・・・・。

ところが、担任の先生は「こうすればいいんだな、まず食べてくれることから始めよう」って、思って下さったらしく、二年生ぐらいから、お昼になると、「一緒に、じゃぁ、うどん作って食べようか。」と言って、作って下さったんですね。それを、次の三年生で変わった担任の先生も受け継いで下さったので何の支障もなく、今でも、お昼はうどん作って、自分だけうどんを食べてしのいでますけれども。お陰様で、食事の面でも、そんな風に問題なくやってこれました。今では、三時まで学校におりますし。そういう風に学校の方は意外とスムーズに入りました。

大変、こう、恵まれたっていうんですか、いい状態で、今、学校へ行っています。学校では、一応、時間割とかあるんだけれども、今のところ、肇は肇の好きな事をやっているっていうのか、先生と一緒にその辺の山登りに行ったり、どっか買い物に出て行ったりとか、先生も結構、肇のペースに合わせてやって下さったんで。

でも、やっぱり少しずつみんなと行動が出来るようになると、先生の方も、熱意からちょっと無理をしてしまうのか、一時期、やっぱり、おねしょしたりとか、「あ、学校でちょっと何かあったのかな」っていうような、そういう時期もありましたけれども・・・。

先生が、そういう家庭での様子を聞いて下さるんで、それが凄くありがたかったいうのか、常に話し合いをしながらやってこれたことが、やっぱり、今の肇が無理なく学校へ行けている要因の一つだろうと思います。

1・11　電車へのこだわり

次に、誕生から現在まで、肇の『こだわり』っていうんですか、そういうものも一杯あったんです。

まず、肇は乗り物が大好きだって、さっき言ったんですけれども、一番の関心は、電車ですね・・・。はじめは、電車の玩具で遊んでいたんですが・・・・。

1・12　十ヶ月の乗車皆勤

肇が実際の電車に乗り始めたのは、三歳七、八ヶ月ぐらいからで、肇が「乗る」っていうんで乗り始めました。それから、まる十ヶ月間、一日も欠かさず、毎日、電車に乗るんですね。たまに、朝も乗らないし、お昼も乗らないし、夕方になっても乗るって言わないし、あ、今日はこれで乗らないで済んだかなと、ほっとしていると、夕方疲れてちょっと寝て起きてから、「今日は電車乗ってないんでこれから乗る。」っていうんでね。もう最終電車ぎりぎりぐらいになって、主人と二人で、もう仕方ないからもう乗せてやろうって・・・。小松駅に行った方がいいか、粟津駅に行った方がいいか、上り下りの時刻表を見てね、駅に車をとばして・・・。

次の駅へ車で迎えに来てもらうように主人に頼んで・・。小松駅あたりでも、夜遅いと誰もいない。静かで気持ちの悪い待合い室で、電車を肇と二人で待って、パジャマ着たままで待ってね・・。そんな風にして乗せた事も何度かありました。お盆もお正月も、ホントに一日の休日もなしに、まるまる十ヶ月でした。

でも、そんな頃は、電車に乗ればそれで良かったんで、それも、

小松に行くとか寺井行くとか意外に近くの駅だったので・・・。
ただ、一番大変なのは、『電車を待つ』ことでした。それで、いつも時刻表を見ながら、今日のこの時間帯で、どこの駅まで行って戻ったら、一番待たなくってすむかとっていう、そればっかり考えながら、取りあえず「乗りさえすれば肇が満足するんだから」っていうんで乗ってたんですね。最初は、やっぱり自分の大変さのことを考えて、肇を怒らさないように、待たさないようにっていうんで、そればっかり気にしていたんだけれども、少し自分も余裕が出てくると、肇は、一体電車の中で、何をしているのだろうか、ということが見えて来ました。

1・13　運転席と、運転手さん

電車に乗った直後は、やっぱり、神妙に座って外をジィーッと見てるんですね。そのうち、だんだん、あちこち動き出して。今度は、電車の運転手さんの所が見たくなって、ずっと見えやすい位置で抱っこして「見せろ」っていうんで、そうしていたり・・・、見てるだけでは満足しなくて、今度は触りたくなるんですね。運転席に「入りたい」って言い出す・・・。勿論、運転手さんの席は駄目なんだけど、電車は前と後ろに同じような運転席が付いていて、一番後ろの車掌さんがいる所に行って、ちょっと目を離した隙に、さっとその中に入って触っていて、慌てて止めるというようなことも何度かありました。
そんな風に肇を連れて歩いていると、結構いろんな人がいるもんですね。「ここ、入りたいんか、見たいんか」いうて、開けて入れて説明して下さったりして・・・。肇には全然分からないのに、「これがスピードメーターで、これがブレーキで」と言って説明して下さる、そんな親切な方もおいでました。「僕、食べるか」って、当時の肇は食べ物に全然興味なかったんだけど、飴を出して下さったりとか・・・。私たちは、いっつもいっつも乗るし、北陸線のこの区間だと、車掌さんや、運転手さんは、大体同じ人が乗ってるもんで、もう、顔見知りになってしまって・・・。運転席にも停車中に入れて貰って、運転台の前で帽子までかぶせてもらって、その気になって喜んだり、そんなこともありました。

1・14　切符への興味

そのうち、肇は、切符に興味を持ちだし、その買い方に注文を付け始めたんですね。今日はお金を入れて自動券売機で買うだとか、いや、今日はオレンジカードを買って、それで買うだとか、いや、窓口で買えとかね、それも小銭で買わないで千円札で買っておつりが出てくるのが見たいから、それを買えとかね・・・。切符を窓口で買えって言われるの、やっぱりちょっと困ってね。当時、窓口から自動券売機に移行していたので、「短い距離は自動券売機で買って下さい。」って駅の方は言うんですね。それで、どうにもならないんでね、「一万円札しか無いんですけど」って言ったら、「両替してあげます」って言われてね。「肇、やっぱり買えなかったね。」ということで、肇はものすごく怒ってたんだけれども、切符買わなかったら乗れないからっていうんで、なんとかしのぎました。
その頃、切符はみんな、あの昔の、ちょっと厚みのある小さな切符が無くなって、みんなコンピュータでパッと打ち出すようになった、丁度その移行の時期で、ところが肇はあの昔の切符が欲しくって・・・。でも、もうないんやね、駅に。それで、大聖寺の駅に行くと、まだ少し残ってて、駅員さんが、コンピュータに替わって、そういう売り方が導入されてからも、「昔のが残ってる間はあげるね」いうて頂いて、一日おきに大聖寺駅へ行って、

その切符を買っていました。何しろ、肇について歩いているときは、もう、必死で歩いているんだけど、後で考えてみると結構面白いことやってるんですね・・・。　それで、切符の買い方については、今でも、あっちで買え、こっちで買えとかいうことあるんですけれども。まあ、それは、そんなに問題にはならなかったんだけれども・・・。

今度は行き先を自分で決め始めたんですね。

1・15　電車による遠出区間の拡大

「今日はここまで行け」とか、「あっちまで」だとか・・・・。「戻ってくる電車がないんや。」って、「ここで今度また、三十分も四十分も待たないかんし、電車ないんやから」っていうんだけれども、駄目なんですね。

ところが、よくしたもんで、行く先を自分で言い出した頃には、（電車を）待つことが出来るようになってきていたんです。自分が次の電車に乗るためには、たとえ、三十分でも一時間でも待ちますよ、っていうんで・・・・。その間、こう、その辺うろうろしたりしながら待って、そうやって次の電車に乗ることを決めだしたんです。

それでも、肇の乗りたい区間が、金沢から福井ぐらいの駅の間におさまってたんで良かったんだけど、やはり、そのうち段々、遠くへ、遠くへと出ていく。普段、ドライブしてても、どこかの駅に出会って、たまたま変わった電車が停車していると、それに乗るっていうんで、乗らせたこともありました。

最初に興味を持ちだしたのが、福井の方の小浜線だとか、九頭竜湖の方に行く越美北線、三国の方に行く電車とか、福井のローカル線に興味を持って、ずぅーっとそっちへ通う。その次が、富山の方へ行って、氷見線だとか、高山線、城端線のあたり、その次行ったのが新潟の方の大糸線ですね。もう、毎週毎週、「糸魚川へ行って大糸線だ」っていうんで、行って・・・。そのうち、「岐阜へ行け」とか、「滋賀へ行け」とか、「名古屋だ」とか、「いや今日は京都に行くんだ」って言って・・・。私と二人の時はあんまり遠くまで言わないんだけれども、土曜日曜、主人が休みになるともう、ほとんどそうやって遠出、遠出で乗り歩きました。

1・16　肇と時刻表

でも、そんな頃、どこでどう憶えたのか知らないけれど、あの子、時刻表を全部自分で見るようになっていました。教えた事は一度もないのですが、私が電車に乗るとき、荷物の中にいつも入っていたのが、小さな時刻表だったんですね。肇から行けと言われたら、いつも困るんで、こうやって、時刻表を繰ってはやりくりしていた。その様子を見てたり、駅に大きなのが貼ってある、あれを見ながら「今、こっちの方に行くにはこの電車で、下りの電車はこうだ」とかやっていたんですね。あの子に教えるつもりも全然無くってただやってたんだけど、いつの間にか、気が付いたら、肇が自分で時刻表を引いてたんです。

1・17　予定表

そのうち、粟津駅を何時に出たら金沢でどの電車に何分で乗り換えしてとかいうの、全部自分で綺麗に予定を立てるようになってきてたんですね。それで段々段々、広がって、三、四年前ですか、とうとう北海道まで行って、「北海道の何とかっていう電車に乗れ」とか言って・・。しょうがないなぁ、っていうことで北海道まで電車に乗りに行ってきたり・・・。その次の年は、「今度は九州へ行って、九州の電車に乗れ」っていうんで、また、「しょ

うがないなぁ」って言って行ってきたりもしてたんですけれども・・・・・・・。

ホントに肇の場合、全て、電車から始まって電車にずぅーっと、現在がつながっているような気がします。

1・18　駅名と漢字、ワープロによる切符の作製

電車のおかげで時刻表を憶えたし、あの子は平仮名の先に漢字を、覚えた。駅名を漢字で覚えました。今は、ワープロで打って、自分で『どこどこ行き』の切符を作ります。

1・19　曜日を決めて電車に乗る

それから、さっき、あの子は電車に十ヶ月間、毎日乗ったって言ったんだけど、その後、乗らない日がぽつん、ぽつんと出てきたんですね。あ、これはしめた、とまあ、思ってたんだけれども、それから二、三ヶ月後には、火、木、土、日、週四日間電車に乗ると自分で決めて、そう決めてから、四年ぐらい経ち、今でも、火、木、土、日は電車に乗る日っていうんで、乗ってるんですね。

1・20　切符への興味の増大

そして、今はもう、電車に乗ることよりも、駅へ行って切符を見ることに興味が移ってきました。使用済みの切符、駅で回収してますね、あの切符を見せろいうて・・・。それを見せて下さる駅員のかたもいらっしゃるんですよ。でも、これは「だめぇ！、触るな」と言って怒られたりね、肇の顔を見たらぱっと片付けてしまう人もいるしね。ホントに見てたらこっちもおかしくなるぐらい、人様々でね。肇は、まず、切符に、何が、どんな風に書いてあるか見たり、変わった駅名なんか特に興味があるようです。

1・21　臭いによる切符の判別

今はもう、半分「おまじない」みたいに切符を鼻の両側にこすりつけます。それも必ずやり方が決まってるんです。まず、鼻のこちら側に、一回、二回とこすりつけます。今度は反対側に、三、四、五、六とこすりつけ、次に切符を別の手に持ち変えて、七、八と・・・・。これだけのことを、そこにある切符全てについてやらないと気が済まない。最初は、何か、やっぱりインクの匂いかなんかが気になったのか、こう、匂いを嗅ぐんですね。最初は確かに匂いを嗅いでいたはずなんだけど、今はもう、鼻の油付けるみたいなもんでね・・・。それで、昨日だったか一昨日だったか、肇と電車に乗った時に、小松駅に居た駅員さんが、その方、いつも肇をかわいがっていて下さる方で、それで肇がいつものように切符を鼻にこすりつけていたら、「匂い嗅いで分かるか。その調子で宝くじも当ててくれんかな。」いうて・・。笑いながらね、肇に何枚もの切符でそれをさせて下さって・・・。こういう方もいるし、いろいろな方がいるので、この頃、駅に電車が到着すると、肇は、まず、改札口から身をのりだして、今日の改札の方は誰かなって見るんですね。

今日は、いつものようなことが出来るか出来ないか、ということで、それぐらい、今はもう、『切符を見たい』所へ神経が行ってて・・・。　これさえ止めてくれたら、電車に乗ってるのも、私も別にそんなに嫌じゃないかな、乗ってる間は楽だし、いいんだけどなって思いながら、いつそれが終わるかどうか分からないですけれども・・・。で、肇に、お天気の悪い日は電車乗るの止めないかとか、今、少しずつ言ってるんですね。それ言ってすぐおさまるとは思わないんだけれども、少しずつ、やめて欲しいなっていうのが本心ていうのか・・・・・。

1・22　座席シート、及び四両目の電車への執着

電車に乗る時、一時期は、シートの色にまで凝ったんですよ。自分で何両目にのるって決めて・・。ちょっと茶色っぽいシートと、青いシートがあって、その青いシートでなかったら嫌だって。ところが、どういう訳か青いシートが、段々減ってきてるんですね。

今、六両編成の電車の四両目にいつも、青いシートの電車が付いている。それで、その時間帯に合わせて乗るっていうふうに自分で決めたみたいです。その電車をホームで待ってるんですよ。

ホームのはずれまで行って、入ってくる電車を待ち受け、通過する電車の座席をよく見ていて、青いシートがなかったら、その電車に乗らないで次の電車まで待つ、いうてね・・・。　それぐらい、徹底してたっていうか、まあ暖かい時はホームに居てもいいんだけど、寒い時にはホントにもう・・・。でも、本人はもう、青いシートの電車来るまで待つんだってね・・・・。何本も電車をやり過ごして、駅のホームで、ずぅーっと電車待って過ごした事もあります。

1・23　Nゲージ

当時、線路を繋げる遊びも段々複雑になっていきました。『こどものへや』で、いつもしてた最初のプラレールでの遊びから、何分の一スケールとか言って売っている、あの重たい電車に変わって、それから、今はもう本物に近いNゲージの鉄道模型（鉄道マニアが使う模型）に変わってきた。Nゲージを買うときは、一時期、一週間に五日、模型屋さんに通ってね。行かない二日間ていうのは、定休日と、遠出した日曜日で、他の五日間は、毎日行って一本ずつ買って来て、だから、小さな貨物列車も合わせれば、多分二百五十本以上にはなってると思います。最近は、もう欲しいものは大体買ったし、今欲しいのは、もう、四本だとか八本だとか、セット売りしか無いんですね。「それは、もう、買えないよ。」いうと、結構分かってくれて、じゃぁ、今度、夏休みに買おうとか、冬休みに買うとか決めて、その時になるとやっぱり、一セット買って欲しいって言います。

1・24　電車をバラバラにする

その電車も、最初は眺めていたんだけど、そのうちに分解し出したんですね。あれ、ちょっと落としただけでも、ガチャンとはずれちゃうんで、偶然はずれたとこから始まったんだろうけれども、店で買った新しいのを、すぐに屋根をはずし車輪はずしてね、分解を始めました。

1・25　電車の色の塗り替え

その次やりだしたのが、色の塗り替えで、ペイントで、いろんな色に電車を塗り替えてしまうのです。それも、七尾線だとか、これはどこどこの電車だとか言いながら・・・。それも、電車の外側の塗り替えだけだったら良かったんだけど、そのうち座席の塗り替えも始めて、分解して中の椅子まで全部塗り替えして、今はもう、買った時の面影無くなってますけれど・・・。

1・26　バス

ホントにもう、電車、電車、電車で来たんですが、その中で一時期、電車と併用して乗ったのが、バスなんですね。今度、。バスにもずーっと乗りました。たまたま乗ったのから始まっているんだけど、大体八歳、八歳ぐらいの時かな。学校入ってからなんですけどもね。これもやっぱり、乗り始めたらしつこいんですよ。一年近く、毎日バスに乗って、小松の駅から発着のほとんどのバ

スは乗り尽くしました。それで、バスも乗ってみたら、これ、電車より困るんですね。バスの本数、金沢あたりだったら多いからいいけど、小松だと本数が少ないので、行って変な所で降りたら戻って来れないんですよ、今度。電車だったら、どこの駅で降りても、いざとなったら、タクシーとかね、パッと対処出来るんですけど、山の中とかね、ローカル線だと、そのバス、一番奥まで行って次に戻ってくるまで、バスが無いんですね。お天気いい時はいいんです。でも、雨降ったり吹雪いたりしてる時に、バス停で待たなければならないし・・・。　小屋が無いと、吹きさらしで待ってなきゃいかんし。だからなるべくローカル線の山とか海とか行く時は、終点まで乗りました。

段々乗る範囲が広がってくると、自分の車を放置する場所に苦労しました。近くのスーパーや、大きな駐車場がある所の近くのバス停で、出来れば屋根のあるバス停に変更するように肇と交渉しました。まあ、ここ数年、ようやく、そういう融通が大分つくようになってきて、まあ、乗せてくれるんだったら、少し譲ろうかっていう感じです。でも、バスに乗ったら、今度、自分の座る場所を決めてるんですね。行く時はこの場所で、帰りはこの場所とか。お客さん座ってたら、「どけ」いうてね。そんな、それだけは止めてね、と頼んでいるのですが・・・。

1・27　駐車中の車を動かす

バスの中では、やっぱり電車と一緒で、運転手さんの様子をよく見てるんですね。それで、たまたまバスが止まった時にサイドブレーキ引かない運転手さんいたら、「サイドブレーキを引け」いうてね。それぐらい、ずぅーっと見てましたね。運転が見える位置に座るとか、見えないんだったら、立って見てるって。それ、見てたおかげかどうか分かんないんですけども、家の車や、人の車、お客さんの車とかが、家の駐車場に止めてあると、ちょっと坂になっているんですが、そこに止めてあった車、勝手に動かしてね、三回ほどぶつけてしまって。一度はホントに門柱にボンとぶつけてね、二回目は、たまたま止めてあったワゴンにドンとぶつかって、三回目はお向かいの家の倉庫、もう、ドーンとやってしまって、これ、修理するのに随分大変でした。（中略）

バスも、冬になると、やっぱり吹雪いたり、雨降ったりで、とっても大変だったんで、肇に「もう、天気の悪い日、乗るの止めようか」言っても、その時は絶対に聞かないですね。で、「電車に乗る日はバスに乗らんようにせんか。」とか言ってたんだけど、もう、それもきけない。やっぱり、毎日乗らんなんと言って・・・。でも毎日毎日乗ってたら、丁度三月の春休みぐらいから、お天気の悪い日乗らないとか、たまに乗らない日が出てきて、そのうち、私が少し前に提案していた通り、電車に乗る日はバスに乗らない、電車に乗らない日だけバスに乗るっていう風に、移行していったんですね。

で、春休みを境に、ほとんどもう、バスに乗らなくなりまして、たまーに、金沢に出て乗るとか、鶴来の方へ行ってそこのバスに乗るとか、いうことはあったんだけれども、乗らなくなりました。それで、まあ、楽になったっていうか、バスはもう卒業したかなっていう感じが出て来たんですね。ところがですね・・・。

1・28　自家用車での走行

次に、肇はですね、電車、バス、もそうなんですけれども、もちろん、家の車でも走るんです。私はペーパードライバーで、車は全く乗ってなかったんですね。十六年ぶりに、一週間、自動車学校に行って、練習して車に乗り始めたんですね。それで、私が今度、車の運転を始めたら、平日、いつでも車であちこち行ける

もんで、ほとんど、外へ出る、車でのお出かけが主体になってきました。それでずぅーっと車でね、あっち行け、こっち行けってね、言葉はまだ、全然出てなかったものですから、指で、こっち曲われとか、あっち曲われとか、真っ直ぐ行けとか指示されながら、ずぅーっと、ホントに毎日毎日走りました。三年間、今でも三年毎の車検までに十万キロ出ちゃうんですよ。それも、私の車だけで。土、日は主人の車に乗りますし、凄い走行距離になります。

1・29　肇の地理感覚

ただ、最初は、あっち行け、こっち行けと言われても、戻ってこれなくなったら困るんで、「いや、そんなとこ行っても分からん」とか、「行き止まりや」とかブツブツ文句を言いながら行ってたんだけど、あの子の地理感覚、どういう訳か素晴らしいものがあって、絶対に迷子にならないんですね。必ず戻ってこれるんですよ。で、あの、町の中だったらそんなに心配無いんだけど、山へ入って行って迷ったのがたった一回だけ。林道の舗装が切れて、もう、こんなとこ行ってどうすんだと言ってね。車のお腹を打つし、やっとの思いでUターンして戻ってきたっていうのが一回ありましたけど。後はもう、ホントに上手く、こう、出てくるんですね。

町の中でも、裏道の狭い所、狭い所へと、あっちへ入って行け、こっちへ入って行けとか・・・。それでも、標識が結構分かって、「こっちは回れない」とか、「一方通行で入れない」とか、「進入禁止だ」とかいうと、コース、ちょっと変えてくれて・・・。で、「何でこんな所ばっかり回っとらんなんの、毎日毎日」って、疲れて家に帰ってから夜、主人に話すと、「いいじゃないか、その内、個人タクシーの運転手でもすればいいじゃないか。肇に教えて貰っていると思ったらそれでいいじゃないか」と言われてね。まあ、それもそうかなっていうてね、ずっと回ってたんですね。

1・30　高級肉の継続的購入

それで、こうやって車で回ってる間に、必ずスーパーへ行って、お買い物の時間が間に入るんです。いろんなスーパー行って、それで、買う物が大体もう決まってて、同じものを、毎日買うんですよ。それで肇は買っても食べないんですね。食べないんだけれども、買わなければ気が済まないっていうんで。いろんな物を買わされましたけど、一番困ったのがお肉だったんですよ。毎日ね、それもスーパーの中の個人経営のお肉屋さんへ行って、自分で買った肉を包みたいんでね、自分で「この肉」って指定して、それをこういう昔ながらの紙ですか、薄板みたいな紙（経木）に入れてくれるんですね。そしてそこへ入るだけ載せて貰って、目方を量る所までしてもらうと、それを自分で袋に入れて、包装紙もらって包んで、シールもらって貼る、それをやりたい。それだけの理由で、毎日毎日ね・・・。

それで、個人経営のお肉屋さんで、あまり安いお肉は置いてないんですね。一番上等な肉を選んで、「今日はこれだ」いうてね、百グラム千何百円のを選んで、お店の人もね、「じゃ、一切れだけ入れてあげるね。」と言ってくれるんだけど・・・。毎日毎日のことだから、食べきれないんですね。冷凍室にどんどんどんどん貯まるんで困りました。（中略）　それぐらい買い続けたんだけど、やっぱり、それもいつの間にか止まるんですね。不思議なもんで・・・。

ああ、どんなに続きそうでも、一生続く事なんて無いんだな、まあ、一年ぐらい覚悟すれば、大体のことが治まってきてるんで

ね。

1・31　レジと袋

まぁ、肉は自分の家で処理すればいいんだけど、今度はスーパーのレジで、レジスターを触らせろとか、袋を選び出して困りました。袋の下に号とか号とか、数字が書いてありますね。その何番の袋をくれと言い出すんです。スーパーの人も、意外と「あ、いいよ」と言って下さる所と、若い女の子でもね、「買い物の量によって袋が違うんだ」言ってね、絶対譲って下さらない。それで暴れてね、見るに見かねて、他のお客さんが「じゃ、私のあげるね」って言ってくれるんだけど、一遍使ってシワの入った袋はいやなんやね。新しい綺麗な袋でないとだめなんだ言ってね。それでもう、なるべくそんなスーパーは諦めようと言っても、どうしても、そこ行かなきゃいけないっていうんで、スーパーの忙しい最中に、床に転がってやっぱり暴れてた事もありますけれども・・・。仕様がないから押さえつけて帰ってきたり、大きい袋が欲しいんやったら、もっと沢山買い物しよう言っても、それも嫌だっていうんですね。自分で必要でない物は要らないんだ言って。随分頑張っていましたね。

それで、『アカシアこどものへや』にも、本物のレジスターを入れて頂いて、ごっこ遊びしながら、段々、スーパーの方へは行かなくなって、今はスーパーに行ってもホントに自分の食べる物だけしか買わないし、毎日行かないし、あの子の要る物、分かってるんで、「今日は買い物してあるよ。」と言うと、まぁ、それでいいかな、というふうな感じに変わりました。そのかわり、スーパーに連れてくと自分の物だけしか買わせなくて、今度は家族の後の三人の食べる物、買えないんですね。お魚は嫌だ、お肉は嫌だっていうんで、自分の買う物だけ買って帰るんですね。買い物も、ずぅーとそんな状態でしたが、今は、もうそんなにこだわらなくなりました。

1・32　肇とプール

今、肇はスイミングスクールへ自分で行きたい言って・・・。上の子がずーっとスイミングスクール行ってたんですね。で、自分もそこのプールへ入りたいんだけれども、「肇はだめだよ」と言ってありました。学校が夏の間開いてくれる土曜日の水泳教室で使う、小松の末広の市営プールが肇のプールで、お兄ちゃんはスイミングのプールだと、去年、ずーっとそう言いきかせてあったんです。けれど、肇はずっと、スイミングスクールに「入りたい」と言ってました。今年はとうとう、どうしてもそこ（ビッグスイミングというスクール）へ入るんだって言いだして・・・。

それで、主人が連れてって、もう、入校の手続き全部やってきちゃったもんですから、今、そっちの方、行ってるんですね。

プール、大好きなんだけども、この大好きな肇が一時期入れなくなりました。で、原因は何か分かんないんだけれども、木場潟付近の流水路に、主人が目離してる間に一度ドボッと落ちちゃって、プカプカと流されてるのを、釣り人さんが見つけて飛び込んで助けてもらったこともあるんで、そういう記憶があるのかどうなのかはちょっと分かんないんですけれども、もう入れなくなったんですね。

その入らない間、肇はプールと全く無縁な生活してたかっていうとそうじゃないんです。車で回っている時に、プールの在るところに行くんです。今、学校はどこでも大抵プール在りますね。

そうすると、ドライブしながら、今日はあっちの学校のプール、で次はまたこっちの学校のプールというふうに、必ずプールの在る所へ行って、フェンス越しに見たり、時々高い所にあるプール

が見えないと、車止めて、車の屋根の上に乗って覗き込んだりとか、抱き上げてくれ言ったり・・・。冬の間なんか、プール使わないから雪よけてないんでね。いつも私の車には、長靴とスコが入ってたんだけど、その雪踏んでプール覗きに行くんですね。そういうことを、プールに入らない間、ずぅーっとやってたんですよ。それも、一年余り・・・・。『肇のプール巡り』って言ってるんだけれども。丁度それが学校へ入る前ですけれども、ずぅーっと続いていてね。

（中略）入り出してからは早かったですね。すぐ潜って、プールサイドから放り込んでくれいうんで、先生がボーンと放り上げるともう喜んでね・・・。学校に行くいうた頃にはまた、プールに入れるようになって、夏の間は毎日毎日、プールへ行って・・・。

（中略）

でも、今年はもうビッグに行ってもしょうがないなって、思い始めていました。スイミングに行くと随分規制もあるんですね。やっぱり。集団の場所では、ルールが一杯あってね、そのうち、どうせ私も、肇もボツボツ断られるだろうと思ってね。それも仕方が無いかもしれないと思っていたんだけれども、ところが、先生と張り合いながら、今はやってます。うまく先生の目盗んで、自分のやりたいことやる。で、プールから上がった時、温風で髪乾かす所、あれで乾かすの肇は嫌なんで、それを先生無理に押さえつけて乾かすと、さっと隙を見てもう一回シャワーで濡らしてきて洗う、それをまた先生が、ぎゅっと捕まえてもう一回する。黙って見てたら、四、五回先生と追いかけっこをしている・・・。肇もこだわるけど、先生もなかなかやるなぁ・・・。それでプールもずーっと今行っています。いつまで続くか分からないけれど、私は「出来ればあんな所辞めて欲しいなぁ、行って見てるの苦痛だわ」と言いながらね、そうやってやっています。（中略）

1・33　肇の音声言語

この間の、肇の『言葉』ですけれども、肇は、一歳から九歳ぐらいまで、少し単語としては出てたんですけれども、話をするっていうところまでは行ってなかったんですね。なかなか言葉が出ないっていうのか。

1・34　パソコンとワープロ

丁度二年ぐらい前から、『こどものへや』で、いつもコンピュータで遊んでるんですよね。肇用のソフトなんかも作っていただいて・・・。そういうの大好きなんで、学校でも先生がワープロを用意して打たせて下さったりしてたんだけど、そのうち、「ワープロじゃないんや」っていうんですね。それで「大きなワープロを買ってくれ」っていうんですよ。肇の言うのは、パソコンの事・・・。

それで、パソコンのお店、やっぱり外から見て分かるんですね。NECとか、パソコンセンターとか書いてあると、車そこに止めて自分でパァーッと入っていって、何するんかって思ったら、キーボード掴んでレジに持ってきて、「これくれ」って言うんで。「そんなもん、買えない買えない」って言ってたんだけど、丁度去年、一昨年になりますか、もう、二年言い続けたので、まあ、しょうがないなっていうんで、『こどものへや』のソフトにも対応できる機種を選んで買いました。

1・35　仮名に音声を添える

肇が、文字を打ち出した頃と、あの子が話し始めた時期と丁度一致してたように思います。最初、文字を拾うんですね。例えば、

「小松」って打とうと思うと、「こ」、「ま」、「つ」と文字を拾いながら自然に【こ】、【ま】、【つ】と言い出しました。

それでね、肇が自分で打っているときに、私も横で見ながら、「あ、小松って打つのかな？」と思いながら、一緒に音出して、【こ】、【ま】、【つ】って探してると、肇もやっぱり一緒にそうつぶやいていて・・・・・・。「あれ、この子喋ってる」いう感じで・・・。

それから暫くの間に、話す言葉がもの凄く増えて来ました。だから、高い買い物はしたけれども、それだけの値打ちはあったなって思いました。

1・36　言葉の効能

それで、今はもう日常的には、私といる限りでは、ほとんど不自由しないし、第三者にも結構分かるように、通じるようになってきました。やっぱり、言葉で通じるようになった分だけ、通じなくってギャーと言って大声出したり暴れたりとか、すぐ直接行動に移るとか、そういう事が段々無くなってきたと思います。

例えば、駅で、人が変わった切符を手に持ってたら、サッと走って行って、パッと取ってくるんで、みんなビックリするんだけど、「見せて」って言う言葉が加わったときには、、やっぱり体が先に動くんだけども相手の驚きは違います。肇も、「見せて」と言えるようになってきて、言えば通じるいうことが分かったんですね。ということで、随分とやっぱり、楽になってきました。

1・37　肇が合わせてくれる

四年生になった肇は、今では、まる一日学校に行って、月曜日は一時までだけど、火、水、木、金、ずーっと三時まで学校で生活して、スクールバスで行き来するようになったんで、随分こう、私自身は楽になってきてね・・・・・。でも、楽になってきて有り難いけど、肇の方が、結構、いろんな場面で、私に合わせてくれたり、話し合いでも折れるっていうんですか、「肇はこうしたいんだろうけれど、こうしてくれないか」と言った時に、「まぁ、じゃしょうがないから、お母さんの言った通りにするわ」っていう、そういう事が、もの凄く増えて来たんですね。そしたらついつい、これまで肇が自分中心だったのに、親の方が自分中心になってきて、やっぱり無理して、肇にギャーってやられて、「あ、しまったなぁ。少し肇が引くようになったら、この頃私が少し横着してるかなぁ」と、時々反省しながら、やってますけれども・・・。

終わりに　――　人との出会い

ずーっとこうやって、肇連れてあちこち出歩いてますと、『N園』へ行ったり、『S大』に行ったり、学校や、いろんな所へ行って、また駅や、街や、スーパーや、いろいろな場所で、いろんな人と接する機会があるんですね。

それで、肇といろんな形で係わって下さる方達が一杯いて、これまでに、肇との十年間に、いろいろ係わって下さった方達のことを振り返ると、本当にいい人達に恵まれてきたっていうか、肇にとっては本当にいい出会いがあって、いいお付き合いをさせてもらいました。それがやっぱり、肇の成長にとって、もの凄くいい影響を与えてるんじゃないかなっていう風に思うんですね。

障害児についての、いろいろな治療法もあるかも知れないし、訓練もあるかも知れないけれど、本当に、こう、肇と直に係わって下さる方っていうんですか、その方の人間性っていうんですか、知識とかそんなもんじゃなくって、その人間ですね、人間的なっていうのか・・・。それが一番大事で、その意味で、肇は本

当にいい人たちに巡り会ってここまで来たなって思うんです。町に出てたら、駅一つとって見ても、それぞれの考え方があって一杯あって、「親がそんなことでどうするんや、もっとダメなことはダメ、いいことはいいでやらなきゃだめや」と言って、見も知らぬ人に叱られたり、ラーメン屋さん行って、ラーメン食べて、肇が調理の方法をみたいので覗き込んでいると、「もうこれでお店来てくれるな」って言われたりとか・・。

いろんな事があったんだけれども、この、『人』ってね、やっぱり係わる人の、その、心っていうのかな・・・、そういうものに支えられて、今までやってこれたように思います。（後略）

2　我が息子「肇」との関わりについて

菊沢　光平

2・1　はじめに

（中略）肇は非常に動的な子供でございまして、もう、鉄砲の玉みたいなもので、どこかに行くと、家に帰ってくることを全然知らない、糸の切れた凧のような子供でした。小学校ぐらいまでのことを中心に、皆さんにご紹介をして、そして現在はこの様な状態になっているということをご理解いただけたらと思います。

最初に私の家族構成とか、家庭のことを、ちょっとご案内したいと思います。私の家は、小松市の木場潟のすぐ近くで、北陸大谷高校というのがＪＲ粟津駅と粟津温泉駅の中間ぐらいのところにあり、その横に出来た新興住宅団地にあります。全町内百六十戸程の町で私の家は、町内の公園のすぐ横にあります。

家族は、私と家内、長男が中学三年、そして次男の肇が、現在小松養護学校の中等部の一年でございます。

2・2　我が息子の特徴

私の息子は、自閉症とかあるいは知的障害、あるいは情緒障害といわれるような知的障害児でございまして、現在、Ａ判定の療育手帳を持っております。小さいとき（二才ぐらい）から、この子はちょっと変だなということを家内も私も気付いていましたが、言葉を話さないことについては、お兄ちゃんも一才半近くまであまり言葉の出ない子だったので、次男もお兄ちゃんに似て遅いのかなあということで、余り気にかけていませんでした。

だけど、手をつないで歩いていると、手を振りきってパッと走って行ったり、あるいは自分の腕が脱臼するくらいに急に引っ張って、何度か腕が脱臼して、病院へ行ったこともある、そんな子でした。ちょっと手を離すともう何処へとんでいってしまうか分からない、好きなようにさせると、歩いてどこへでも行ってしまうわけです。　私はサラリーマンで会社に勤めており、家内は専業主婦で、家で二人の子供を見ています。長男と次男はちょうど一才違い、学年でいいますと二年上のお兄ちゃんがおります。正確には一才半くらいしか離れてなくて年子なんです。お兄ちゃんはお兄ちゃんで、いろんな要求をお母さんにします。一方次男の肇は、ちょっと目を離すと何処へでもとんでいってしまい、近所の家へ土足のまま上がり込んで、そして寝室のベットにまで上がり込みドロドロのような状態にしてしまう、それで近所の奥さんからひどいお叱りを受けて、ずっと謝って回ったり、当初は車が好きだったので道路に止めてある車の鍵が開いていると、そこに乗り込んでエンジンをかけてみるとか、いろいろないたづらをしました。

2・3　危険な事への遭遇

ある時、北陸鉄道浅野川線の電車を動かしました。内灘の終点

で止まっている電車に乗り運転席に行き、その動かし方というのをたぶんよく自分で見ていたんだと思うんですが、運転手さんが降りたスキを狙って、ハンドルを巧みに操作をし実際に動かしました。そんなことまでするとは思いもつかず、すぐにびっくりして止めましたけれどもきっと本人は運転をしたくて、たまらなかったのだと思いました。また四才頃の五月のゴールデンウイークに、子供を、木場潟へ遊びに連れて行って、私が、ちょっとトイレで用足しをしている間に、ぱーっと抜け出していき、潟へ流れ込んでいる一メートル半か二メートルぐらいの流れの速い川に橋が架かっていて、そこからたぶん流れを見ていて落ちたんだと思うんですけれど、木場潟でおぼれていました。多分川へ落ちて、そしてずっと十メートルぐらい流されて、潟まで行き、近くにいた釣り人が服のまま飛び込んで、助けてくれたという事もありました。

あるいは、二階で遊んでいる息子がトリプルロックにしてある鍵を開けて窓の外へ出て、そして屋根からたぶん転落したんだと思うんですけれども、庭の方から子供のなき声が聞こえて来ました。上にいるはずの子供が、下にいるはずがないと思っていたら、ちょうどその庭のやわらかい苔の上に落ちておりました。そしてたまたまかすり傷ぐらいで終わったんですが、打ちところが悪ければと思うと本当にぞっとするようなこともありました。

あるいは、これは学校に上がる前年の真冬の寒い日の夜、ちょうど雪が十センチぐらい積もっていて、そしてそれが固めの雪で、その上にちょっと柔らかい雪が積もって、夜は路面がもう凍ってつるつるの状態のそんなときだったんですけれども、行方不明になりました。玄関の戸は普通鍵をかけておくんですけれども、だれかお客さんがみえて、そのままになっていたんだと思うんですが、知らない間に家からちょっと抜け出して、そしてずっと木場潟の近くのたんぼ道を、潟の方にまっすぐ歩いていて、またま泥の深いたんぼ中で、後で見てわかったんですけれども、靴が脱げて、後は裸足の状態でずっと農道の方へ歩いて行った様で、私も家内もいろいろさがし回っていましたが、なかなか見つかりませんでした。そしてちょうど家内が車で走っているときに農道を歩いているのを見つけて、もうその時は、顔も、唇にも色はなかったですね。足は凍傷のような感じで、体や服は泥だらけで、すぐ家に連れて帰って、ぬるま湯でお風呂にいれてきれいにいたしましたけれども。本当にわずかな時間遅かったり、なかなか見つからなかったら、本当に凍死していたと思います。そのくらいいろいろ自分であっちこっちとんでまわって、そしていろんな事をしでかす子でした。

2・4　現在までの生い立ち

そんな子なので、学校に上がるまでは、幼稚園とか保育園とかへは行っていませんでした。家内は保母をしていたので、自分の子は自分で見ると言いまして、上の子を幼稚園にやって、下の子は自分でずっと見ていたんです。ただ、ちょうど親子通所センターのような通所施設で「N園」という所が小松にあるんですけれども、そこに週二回くらい通って親と子が指導を受けていました。小学校に上がる頃までに、そういった保育園とか幼稚園で団体生活をしたことがないものですから、学校へ入れるときに、これはやっぱり親でも面倒をみれない子を、学校に預けるわけにはいかないという判断で（もう少しいろいろ子ども達の中で交われるようになってから学校に出そうという）就学猶予願いっていうのを出して学校に出さないつもりでした。しかし、最近の法律では、どうしても六歳になったらどこかの学校に籍を置かなければならないということで、現在の小松養護学校の訪問教育に籍を置

かせてもらいました。この訪問教育というのは、週に二回、先生が自宅へ訪問して、そこで子供といろいろ接して指導して下さる制度です。訪問教育に一応籍を置いて更に「N園」というところへも従来の生活習慣を継続するために籍をおいてもらって、そして従来と同じように「N園」にも通園しながら、訪問教育よりも「N園」の方に重点をおいて、そしてたまに学校の先生に、「N園」の生活状態なども見て貰いながら徐々に学校の方にウエイトを置いていくようにいたしました。このときの校長先生は、たまたま私が若いときに会社のバレーボールチームの監督をやっておりまして、一方、校長先生は小松高校のバレー部の顧問であった関係で、バレーボール協会とか、バレーボール教室なんかを一緒に協力してやっていたことがありまして互いによく知っておりました。その校長先生が、「菊澤さんのお子さんっていう事は最初は知らなかったんですけれども、子供のために、あせらんでゆっくり行きましょう。子供が好きなように、あんまり無理せんとやればいいし、担任の先生にもそういったことを言っとくから」ということで、訪問教育に入っても、本当に自由なことをさせて貰らえました。担任の訪問教育の先生も「校長先生が好きなことをやっていいからっていうことで、私も自由にやれた。だから非常によかった」というふうなことを言っておられました。実際には家庭での訪問教育というよりもいろいろな所を廻り歩いた事が多かった様です。そして、学校に少し興味を持ち始めて学校の方に行き出しまして、そして最初は家内が学校の方にずっとついていきまして、本人が帰りたくなると帰れるように駐車場に車を止めて、いつでも帰れるような状態にして学校に通っておりました。そういう状態が、小学部の三年生まで続きまして、四年生になったら、一応訪問教育から普通の教室に移りお友達が四人か五人おり、そこのクラスに入るということだったんですけれども、男の先生が一人ついていただきましので、学校の中というよりも、小松養護学校は山の中にあるもんですから、山とか川とか、あるいは車で先生にドライブをして貰ったり、そんなことをずっとやってもらいました。そしてある時は私の勤めている会社にまでその先生と一緒に車で守衛所を突破して入ってきたことがあったらしいです。そういうふうに割と自由な無理のない様な受け入れ方をしていただいて、養護学校の方にうまくなじんでいきました。

ただ、肇そのものは先程申しましたけれども、非常に行動的で一旦外へ出ると、なかなか家に帰ることをしらない子で特にたとえばドライブとか鉄道が好きで、学校から帰るとすぐ自分であっちこっち行く先を決めて出かけていました。家内が車を運転して福井方面とか、金沢方面とか、あるいはずっと白山麓の山の中とかですね、あるいは電車に乗って福井とか金沢とか、ある時には富山ぐらいまで行ったりして、そして夜遅くなるまで家に入りません。夏場ですと八時か九時ぐらいになってもなかなか家に入ろうとしないわけです。特に、せっかく帰ってきても家が公園の横で、子ども達が日暮れまで騒いでいると、すぐその公園にとんでいってしまいます。家内が子供が家に入らなくて大変なのでノイローゼ気味になってですね、何度も今の家が公園の横だからまずいんでどこか別の所に変わろうということを言いました。私は、基本的には他の所に変わっても、必ずこの子はいろんなことをまたやりたがる。従って家を変わっても解決しないから、じゃあ公園に出れないように塀をしたり、生け垣をするという対応をしたり、玄関の門にはちょっとアコーディオン型の扉みたいな戸を取り付け、外に出れない様にしました。それでも二階から公園のところが全部見えますので外へ出たがりました。だけど放置は出来ないので、私が仕事から帰ると、家内と必ずバトンタッチをし、

肇を追っかける役を私がやりました。その間に家内が食事の準備とか、それからお兄ちゃんの世話とかをやるようにして、私がドライブに連れていくなり、公園で遊ぶなりします。しかし、私はサラリーマンで、残業等で遅くなってなかなか帰れないこともあり、そういう日が長く続きますと、家内が非常に精神状態が悪くなってきます。そしてまた同じような繰り返しで「どっか変わりたい」というふうなことを言い出し、いろいろ悩みました。今は子供も落ちついて、結構自分で色々なことが出来たり、そしてとんでいったまま帰らないというようなことはなくなりました。

お父さんとお母さんを見失う事がない様、迷子にならないように、子供の方から親の元に帰って来るようになったのです。これはいつ頃からといいますと、小学校の三年生頃のある時に、列車に乗っていて本人が列車から降りて何かをしていたら、ちょうどドアがしまって置いていかれそうになったことがあるんですけれども、たぶんそのあたりから、少し変わってきたのではないかと思います。

わたしも子供があっちこっち飛んでいってしまうもので、そっと時々かくれて、本人を見失わない範囲で、もうお父さん帰ってしまうというような振りをして子供の行動を観察する事があります。たぶん小学校四年生か五年生ぐらいだったと思うんですけれど、よく土曜・日曜になったら汽車に乗って遠出をし、私と肇と浜松の駅へ行ったときのことなんですが、その時も本人がいろいろ汽車を降りてすぐ駅で自分の好きなところへ走っていってしまうので、私が「肇を置いてもう家へ帰るよ」といったことがあるんです。本人を離してしまって、本当に迷子にして、十分間くらい、彼と連絡が付かないようになったことがあります。その時たまたま本人が駅の待合室へ行って、そして「菊澤」っていう名前をちゃんと言ったらしく、駅の案内所から構内放送で「菊澤さんのお子様が迷子です」というアナウンスが入り、それであわてて私が駅の待合室に引き取りに行ったことがあります。ちょっと目を離した隙にそんなふうにちょっといなくなってしまって困りかけたことがあったのですが、実は迷子であわてふためいたのは親の方で、子供の方は落着いて駅の案内所へ行き放送をしてもらって実に冷静な行動を取っており安心しました。そんな頃から親の後に迷子にならない様にくっついてくるようになりました。常に私や母親の居所を確認しながら自分が行動をするというようになっていきました。

2・5　地域（社会）とのかかわり

次に地域社会とのかかわりのことをお話しします。家の近くの肇の好きな小学校で、串小学校とか月津小学校とか木場小学校があります。ここへは、子ども達と一緒にちょっと何かをやりたいために出かけたり、あるいは学校のプールに非常に興味をもっていて、これらの学校のプール巡りをするような時期がありました。これは確か小学校の二、三年くらいだったと思うんですけれど。自分もプールに入りたがって、串小学校（ちょうど私の勤めている会社の近くの学校で家からは四、五キロくらい離れている肇が非常にお気に入りの学校）のプールに、夏休みになるとお願いをして一緒に入れさせて貰ったり、その学校の中をいろいろ探検して歩くということもしました。その学校に大変親切で、障害児に理解のある女の校長先生がいらっしゃいまして、学校の玄関前で本人は入りたがっているけれども、授業中なので私が必死に引き留めたことで、肇がパニック状態になっていたら、ちょうど校長先生が出てきまして「お父さんそんなことしないでもいいですから、私がちょっと見ますから」と言って、校長先生が家の子を連れてずっと一回りして、そしてニコニコの笑顔で帰ってきた

ことがありました。以来、そこの学校の先生や児童も、こんな子が時々来ているという事がわかる様になりました。そこの少年野球とかサッカーの練習をやるときに、必ずそこへ行って球拾いをしたり、あるいはその子らと一緒に練習の最後に運動場の整備なんかをするときに自分も何かを持ってやりたがったりするので、一緒にさせてもらったりすることもあります。そんなことからお友達といいますか、ちょうど、気が合うような子供が出来て普通の学校に通っている子供さん達に興味が湧いてきたんじゃないかと思います。

特にその後お兄ちゃんが通っていた水泳教室「小松ビッグスイミングスクール」っていうんですけれども、お兄ちゃんが六年生になってそのスイミングスクールを辞めた時に、本人が行きたいって言い出しました。それは確か小学校四年生だったと思いますけども、自閉症の子供である事を支配人に了解をして頂いた上でスイミングスクールに行きだしました。とんで歩く子で、本当は先生が一人つかなければならないような子なんですけれど、ちょうど引き受けて下さった先生が、一番最初の日からちゃんと子供の目をしっかりと見ながら（ちょうど水の中に入って、目の高さで合わせながら）本人は言葉がよく話せないんですけれども、肇の心をしっかりと捕らえて、こう目で見ながら、合図をしながらうまく指導をしていただいて、又多くの友人が出来、本人にとって大変よかったんじゃないのかと私は思っています。家内はプールにやるのは反対だったらしいんです。これは私の独断でそこに行きたがっているので、即入れてしまいまして、あとで家内とトラブルを起こしました。しかし、私は結果的にそこに入れて良かったなあと思っているんです。なぜかともうしますと、そこに入ったことによって進級テストがあり目標を持って頑張ろうという気持ちが出て来た事、友達に敗けたくないという競争心が芽生えて来たことです。そして更に串小学校とか月津小学校とか木場小学校の多くの子どもさんらと知り合えるきっかけになりました。そしてまた、そこはバスで子供達をずっと送り迎えしておるんですけれども、そのバスも大好きで、何号車のバスでだれだれをどこで拾って、何時何分ぐらいにそのバスがこう走って、どこで拾うというようなこととか、そこに来ている子どもさんの名前をずっと覚えていって、〇〇ちゃんは、どこから乗る、この間も串小学校の近くの子どもさんで、名前はちょっと忘れたんですけれども、その子どもさんの家をどうして覚えたのかわからないのですけれども、串小学校に遊びに行ったときにたまたまその子の家まで上がり込んで握手をして来たらしいんです。そんなことをして、お友達というか、たくさん自分の知っている人を作って、そして他の子どもさんも肇をみると、「あ、あれ、ビッグスイミングスクールに来ていたあの子だなあ」とすぐにわかりまして、肇を理解してくれる子どもさんが増えたように思います。

粟津児童館という県立の児童館があるんですけども、そこに行っても、時々ぱっと顔を合わせて「あ、あの子だったね」と声をかけて下さる友達も時々いらっしゃいます。最近は、フィーリングの合う子供さんを見ると「握手してください」と声をかけていろいろな所で握手をしながら自分から積極的にお友達を作っています。（従来は他の子供さんの背中をさわりたがるので、「握手してください」と手を触わる様に変えて、親が「この子はよく言葉が話せないのでお友達になってね」と補足説明をしています）

2・6　より豊かな生活体験を求めて

それから、次に、あちこちへとんで歩くことで、肇そのものは日本各地の地図や非常に分厚い時刻表の中を全部読みとるんです。字は教えてないけれども、各地名なんかも、どうも時刻表を

開いて、そして平仮名が読めるので、どうもその平仮名を読んで、そしてワープロで漢字変換をしているようなんです。漢字変換をしながら、駅、たとえばここから大阪に行くときに、何時何分の列車に乗って、そして福井に何時について敦賀に何時について、そしてどんなふうにして行くかということを、もう頭の中に全部覚え込んでしまって、そして途中、たとえば敦賀の駅で待ち合わせの時間が二分くらいしかなくても、しっかりと時計の秒針まで読み取り、自分でぱっと時間的なものを計算して、降りて駅の改札口へ出て切符を買ってまた乗ってくるというような、そんなことをするんです。それから方向感覚がものすごく発達しており、動物的な勘をもっているんじゃないのかなあと思うくらいです。よく、どこへ行くときにはどこを曲がれというようなことをうまく自分で指示をして、そして目的地にきちっと行くんです。金沢市内で色々な狭い路地や住宅地に入って、わかんなくなっても、家内なんかは方向音痴なので子供の言うとおりに行けば、そこへぱっと出てこれるっていうんです。私も子供と一緒に結構あちこちへドライブするんですけれども、九州へドライブしたときにびっくりしました。初めて私は九州の大分へドライブに行ったんですけれども、本人は大分駅に行って、そして大分駅で切符を買いたかったようなのです。大分市内の変なところをですね、あっち行け、こっち行けという風なことを指示されて、本人は大分駅なんか知っているはずがないんだからいけるはずがないと思っていたんですけれども、狭い変な住宅地を曲がりながら、ぴったり大分駅に着いたり、あるいはずっと鹿児島の方までマイカーで旅行をしたことがあるのですけれども、そのときに一週間ぐらいかかる旅程なんですけれども、自分で何処に泊まって、そして次の日はここに泊まって、次の日はここに泊まってというふうにして、たとえば福岡に泊まって熊本に泊まってそして鹿児島に泊まって

いうふうな、そうした詳細な計画を自分の頭の中で計算をして、そしてこの日どこに何時何分に着いてというふうなことを言っていたのを思いだし、後で振り返ってみると、全くそのとおり行けることがわかりました。彼はなんでこうわかるのかなあというようなことをいろいろ考えてみたんですけれども、普通高速道路で走ればだいたい時間的なものは読めます。ところが、彼は当初は特急とか高速道路が大好きだったんですけれども、最近はどうもローカル列車とか、普通の国道を走ったり、ゆっくり走るのが好きになりまして、そういった高速道路なんかはほとんど通らなくなったのです。そうすると交通渋滞になったりしてよけいに時間が読めないのに、うまく時間を調整して行動計画（旅程表）を作っています。調整ではなくて、前もって時間を計る、計算することが、どうしても私にはなかなか理解できませんが、人間ナビゲーターを積んでいるのと同じなので、最近は彼を信じて全く地図など見たり予定表など作成しません。

ちょうど去年の暮れから今年の正月にかけて、もう一回九州の方へ、彼が立てたとおりの計画で行ってみたのですけれども、それはやっぱりぴったりの時間帯で行くことが出来、予定にしたがって前もって安心してホテルの予約もできました。今回は一週間以上の旅行になりますが、彼の立てた計画通り、はじめて鹿児島からずっと奄美大島まで行って来ました。当初は列車だけの興味だったんですけれども、なんとかして列車だけから抜け出したいなあというふうなことからフェリーで佐渡島につれていったことがきっかけになりまして、今度はフェリーに興味を持って、全国各地のフェリーダイヤや港の位置をみることを覚えたり、それから各港からどんなフェリーが何時に就航しているのかということもずっと読みとりまして、そして自分で計画を組んで、このフェリーに乗りたい、この列車に乗りたい、ここで泊まりたい、何時

何分に出て、何時何分に着くという細かいスケジュールも立てるようになりました。こういったことを、自分が時間とお金をかけられる範囲でどんどんやってやりたいなあと思いながら、最近は行き先が北海道に行ったり、九州に行ったりしまして、私の運転した県は沖縄県を抜かして全部の県を運転しました。今年、九州に行ったときにはフェリーも使った関係で二五００キロぐらいしか走っておらず、少なかったのですけれども、去年北海道に行ったときは十一日間で四五００キロくらい走りました。そんなことで私の車はポンコツの使い古しになるまでだいたい十万キロから一五万キロくらい走ってまして、もう三台走りつぶしました。たぶん肇とともに、地球を十周するくらい走っています。そういったところへ出かけるときはたいていお兄ちゃんもお母さんも家族で出かけます。そのためにワゴン車を買いまして、ワゴン車の中で眠くなったら寝たり、それから宿がどうしても取れないときはそこで泊まったり、そんなことをしながらいろいろ子供の持っている夢とか、希望、要求、欲求とかを満たしてやり、同時に彼が持っている素晴らしい個性や能力なんかを見いだしてやりたいなあと思っています。最近は、親自身も彼との波長が合って来たようで、子供との旅行みたいなのが楽しみになりました。最初はいろいろ何もわからなくてあっちこっちへ振り回されて、いつになったら家に帰れるのか分からない状態で、非常に不安でイライラすることもありましたけれども、最近はお兄ちゃんも家内も車の中でいろいろ話をしながら、あるいは肇の鼻歌を聴きつつ、車内で喧嘩をしたりからかったりしながら楽しい思い出を作っていっております。

2・7　子供の成長の為に努力していること

私、肇とつきあいながら、あっちこっちへいきまして、こういった知的障害者っていう子供、そういった障害者をやっぱり理解できない人もたくさんいます。結構大きくなっておるもんですから、親のしつけはどうなっとるんやというふうなお叱りを受けることがあったり、子供がいろんなことをしでかして、そして謝って回ることもありますが、そうすることによってその人もまた理解をしてくれたりしますので、大いにあっちこっちに出かけ、多くの知らない人々によく知ってもらうのはいいことなんだなあと思っております。

当初は同じところばっかりだったんですけれど、同じところへ何回も行っていても、やっぱり子供はちょっとまた違ったことを見いだしたり、前とはちょっともう一つ余分なことをしたり、あるいはそこを基点にして別のところへ行ったり、というふうに少しずつ変わってきています。同じことばっかりやっているように見えても、長いスパンで見ますと、やっぱりものすごく成長しているので、あまり気にしなくてもいいなあと思うようになっています。

とにかく子供に接している親の心理状態が即子供に反映されますので、常にゆったりと落ち着いたゆとりのある気持ちを持続する様に心掛ける事が大切です。子供がパニックになったら、まず自分自身の気持ちを確かめて、やさしく冷静に接してあげる事が重要だと思います。